

熊野の  
森林から

# 怪熊野

「旧・中辺路町の怪異(其の二)」

其の六

和歌山大学  
システム工学部  
環境システム学科  
中島敦司教授



富田川の最上流にある兵生(ひょうぜい)には、かつて小学校があった。校舎は今でも残っている。

熊野古道の中辺路は、田辺と本宮を行き来する際、富田川水系と日置川水系の間を山越えしなくてはならない。西側を流れる富田川は、果無(はてなし)山脈の安堵山に源を発し、上富田方面に流れ、南白浜で海に接する。富田川は、源流から河口まで(小規模な取水堰(せき)はあるが)ダムが無い貴重な川で、特に上流域の自然環境は非常に良好である。



富田川最奥の兵生(ひょうぜい)は、昭和中期までは森林鉄道や学校まで整備された林業で栄えた地区であった。江戸時代の『紀伊続風土記』には「道は二つあるが、険悪でほとんど歩くことができない」とあり、深山険僻な場所であった。そんな兵生に、怪力無双の巨人「松若」の話が伝わる。その昔、黒々した髪が首筋まである大きな男の子が産まれた。歯まで生えそろうつていた。松若と名付けられたこの子は、とんでもない大めし喰らい。「自分のせいで家族が飢えてしまう」とでも思ったのか、松若は徐々に山で一人で過ごすようになり、10歳になる頃には家に帰らなくなった。山の奥で獣を追いかける巨体の松若を見かけた者は「鬼になった」と噂した。

ある夜、兵生に盗賊が現れた。必死で安堵山へ逃げ込んだ村人が「松若よお」と叫んだ。すると地鳴りのような声とともに松若が現れ、瞬く間に



兵生(ひょうぜい)にある春日神社は、廃村になってから数十年が経った今でも大切に祀られている。木漏れ日の中、その鮮やかな朱を見かけると、感動に似た驚きを感じることだろう。

盗賊を撃退した。村人は、お礼に餅をついたが、松若は「餅はいらん、塩をくれ」と言う。塩を集めて持たせると「なんぞあったら、安堵山でわしの名をおがれ(叫べ)。助けにくる」と言い残して山に帰っていった。その後、松若の姿を見た者はいないが、冬の夜に「うおお」という悲しそうな声が安堵山の方から聞こえることがあるそうだ。若松は塩を求めたが、熊野の山中では塩にまつわる伝承が多く残る。それだけ、塩が貴重であったのであろう。

中辺路の怪異話に関しては、インターネットサイトの「みちとおと」と「みくまのネット」に詳しく書いてあるので検索されることをオススメする。両サイトともに話と地図がセットになっていて分かりやすい。今回のコラムでも参考にさせていただいた。いずれとともに、新しい記事がアップされるのは筆者にとっても楽しみである。

**中島敦司(なかしま あつし)教授プロフィール**  
昭和38年、岐阜県生まれ。三重大学大学院生物資源研究科博士後期課程を修了。平成8年から和歌山大学システム工学部講師、12年から助教授。19年から教授。専門は森林生態、自然再生、砂漠緑化、海岸林再生、地域資源、地球温暖化、自然エネルギー、民俗(妖怪、伝承)。NPO活動にも力を入れる。熊野方面には年間30〜50日は訪問し、研究する。

